



民主党  
オープン・フォーラム

## 「近現代史研究会」

堀内正範

朝日新聞社社友

「月刊文風」編集人

前月号で特集した「藤井裕久民主党最高顧問に聞く」で

ご紹介した「民主党近現代史研究会」がはじまりました。

### 「近現代史研究会」に参加して

二〇一三年二月二一日、「民主党オープン・フォーラム（近現代史研究会）」に参加させていただきました。

岩見隆夫講師（毎日新聞客員編集委員）の『今、政治家が歴史を学ぶ意義』は、政治家の用いる「歴史」ということばの意味合いをたどりながら、長老中曾根（康弘）さんの三つの意思「古い書物から学ぶ・先達を訪ねる・歴史の現場に行く」を学ぶ規範として持つことの有効性、不破（哲三）さんの「歴史は戦争である」という認識からの侵略戦争に対する反省の欠落とそれによる平和存続への危惧、田中（角栄）さんの「戦争を知っている人がいる間は大丈夫」という体感的平和論などが語られて、「戦争と平和」を巡る議論となりました。

講師の岩見さんから「歴史は戦争の歴史」とする発言があり、それに返して座長の藤井さんが同じことだけでもいい

って、「歴史は平和の歴史」と重ねたところに、見事にこのフォーラムの持つ「多重性」が示されました。

「戦争と平和」という多重性は、戦争は起こすべきではないが起きてしまった戦争はどこかでやめられなかったかを知る（平和の裏に芽生える戦争の芽を摘む）ことが歴史を学ぶ意義だという江田（五月）さんの平和主義にも、防衛大臣を経験した北澤（俊美）さんが「憲法九条」の存在によるシビリアン・コントロール（平和を守るべき軍隊の存在）を実感したというところにも如実に示されていました。

「歴史を学ぶことは戦争と平和の多重性の『今』を知ること」というのが、わたしのメモになりました。

半世紀を超えて堅持してきた平和の裏で、世論としてうごめく偏狭なナショナリズムに訴えて、国防軍や核装備までを想定し、「平和憲法」を戦争の側から改変しようとする安倍（晋三）政権や同調者の主張に対峙して、近代の歴史で経験した「戦争と平和」の多重性を平和の側から読み解くことで、自分の国は自分で守る「平和維持」の意識を「戦争を知らない」国民に醸成すること。それが「今、政治家が歴史に学ぶ」ことであり、この国の将来にむかって政治家やジャーナリストがなすべき努めなのだという暗黙の確認が会場に生じたのは、岩見さんの提案によってでした。

岩見さんは、民主党として「憲法」論議は受けて立つべきであるという、歴史を知り未来を見通す政治家の責務への強い要請を、政治ジャーナリストとして突き付けたのでした。講演と質疑のあいだに、わたしはいくつかの課題を思い合

わせていました。

【核廃絶】 民主党が政権についた直後の二〇〇九年九月、安保理事会で非常任理事国の日本の首相として、鳩山（由紀夫）首相が「唯一の被爆国として果たすべき道義的責任」をいい、「核廃絶にむけて先頭に立つ」決意を述べたことが思い合わされました。日本への国際評価は「平和国家」の堅持にあり、高いレベルの「核の平和利用」である原子力発電、平和利用の衛星誘導技術などは「戦争と平和」の多重性において国家として堅持し顕示すべき科学技術でした。

3・11以後、「原爆と原発（戦争と平和）の核被災（被曝）国」としての対処は新たな課題となりましたが。

【戦力】 「平和国家」の基本は、他のいかなる国にも依存しない自衛のための「不戦の軍事力」であり、相手を納得させる「能戦の文化力」であり、それを支える「豊かな経済力」にあります。これらが三位一体として常備すべき「戦力」であり「国力」であることは論を待ちません。

【兵役（平和役）】 「平和憲法」とともに青年が「国を守る」意識を共有するための「兵役（平和役）」として、自らすすんで国土建設や防災支援（国防役・主に男性）や福祉・介護（公助役・主に女性）に従事すること。

【平和の証】 「平和憲法」（とくに九条）とともに高齢者が「自助・共助」に努めて、後人に敬愛されながら天寿を全うすることが「平和の証」であること。

「平和国家」を守る意識の醸成と共有は政治の側の、とくに再建民主党の求心力の核となる課題であると信じます。